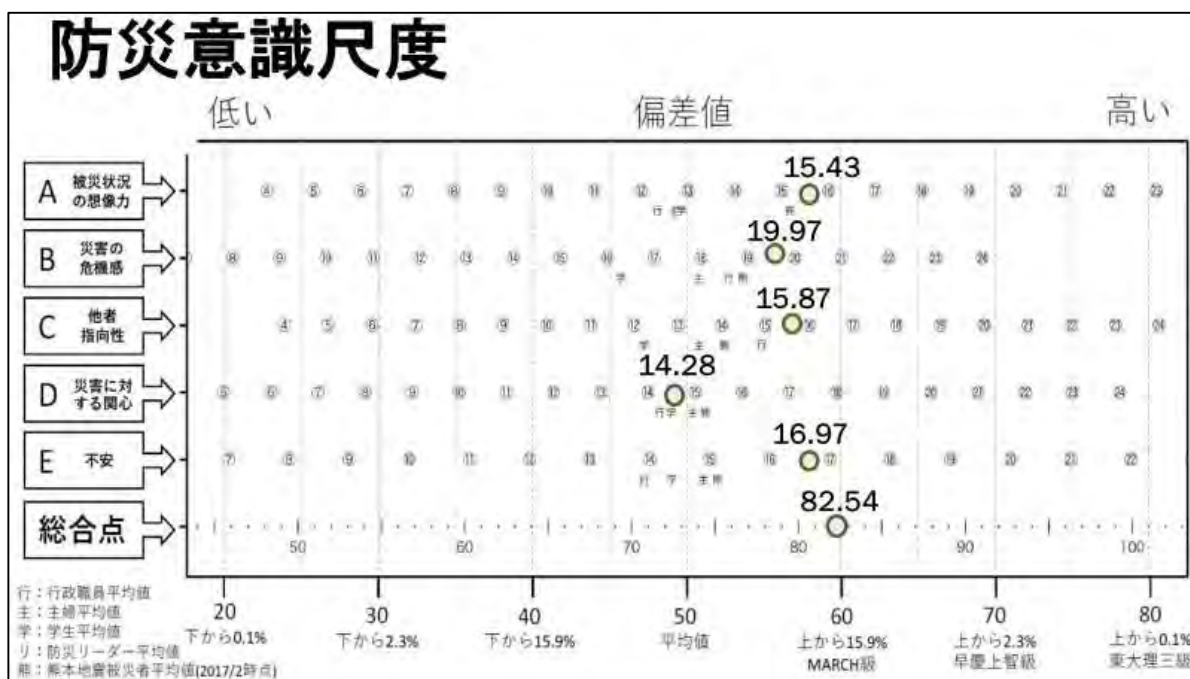


7) 防災意識

防災意識については尾関らの尺度を用いて、一般的な全国平均値と比較した。Aスコア（被災状況に対する想像力）は15.43であり、平均値の12.98よりやや高かった。Bスコア（災害に対する危機感）は19.97と平均値17.70、Cスコア（他者指向性）は15.87と平均値13.20、Eスコア（不安）は16.97と平均値の14.83と、平均値より高い値であった。最も低かった項目はDスコア（災害に対する関心）14.28であり、平均値14.62とほとんど同じであった。防災意識尺度総合点は82.54となり、平均値の73.33点より、高い点数となった。

このように、災害に対する関心を高めることによって、防災意識のなお一層の向上が期待できることが明らかになった。「自分の利益にならないことはやりたくない」「自分の身近なところで起きそうなことだけを考える」「普段は災害のことは考えない」「災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで充分だと思う」といった内容へのアプローチが有効であろう。



Ozeki, M., Shimazaki, K. & Yi, T. 2017. Exploring elements of Anti-disaster Consciousness: Based on Interviews with Anti-disaster Professionals, Journal of Disaster Research, 12(3), 631-638.

島崎敢・尾関美喜：防災意識尺度の作成(1)，日本心理学会第81回大会発表論文集，69，2017

Aスコア(被災状況に対する想像力)	災害が起きたらどんなことが起きるか、何が必要か、何をするかを想像する力です。これが低い人は、災害のことを調べる、被災者の話を聞くなどして災害を知り、想像力を養いましょう。
Bスコア:災害に対する危機感	災害をどのくらい深刻に捉えているか、現状ではまずいと思っているかを表しています。これが低い人は、災害は明日来てもおかしくないことを再認識し危機感を持ちましょう。
Cスコア:他者指向性	社会や人のために何かをしようと思う心です。災害は地域の人がみんなで協力しなければ乗り切れません。これが低い人は共助の大切さを再認識し、他人のことも考えるようにしましょう。
Dスコア:災害に対する関心	災害に興味を持ち、災害を自分のこととして捉えている程度です。これが低い人は災害に無関心です。まずは災害を自分の問題として捉え、防災のために自分か何をするかを考えましょう。

Eスコア:不安	災害のことを心配している割合です。不安は災害に対する備えの原動力にもなりますが、A～Dと違って、高すぎてもよくないことに注意が必要です。適度な心配を心がけましょう。
総合点	あなたの「防災意識」の全体的な水準を表しています。自分の防災意識が他の人と比べて、高いか低いかわかり、低かった人は今よりも災害や防災のことを考えてみる機会を増やしましょう。

8) 避難施設での健康管理、地域の地理や歴史、備蓄食品の調理、及び、日常的な食に対する態度

① 帰宅困難者支援対策の認知との関連

帰宅困難者支援を知っているの方が、知らない者に比べ「避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる」「健康を害さないために必要な予防行動を実践できる」、「地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる」割合が高かったり、「地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある」割合も有意に高かった。

② 災害時の食料の備蓄との関連

災害時の食料を備蓄しているの方が、備蓄していない者に比べ「避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる」「健康状態を推し量るための手段を知っている」、また、「地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる」「地域の災害の歴史を知ることによって、防災に関する日常の備えを見直すことができる」割合が高かったり、さらには、「地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある」割合も有意に高かった。

③ 災害ボランティアへの意向との関連

帰宅困難者支援を知っているの方が、知らない者に比べ「健康を害さないために必要な予防行動を実践できる」割合が高かったり、「食事を作ることが好きだ」「地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある」割合も有意に高かった。

		災害時の食料			値	自由度	漸近有意確率 (両側)
		備えている (235)	備えていない (147)	全体 (382)			
帰宅困難者の一時滞在施設や避難所で生活する状態での知識・態度	避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる	16.2%	8.8%	13.4%	9.305	4	0.054 *
	健康を害さないために必要な予防行動を実践できる	7.3%	4.8%	6.3%	3.266	4	0.514
	健康状態を推し量るための手段を知っている	6.8%	4.1%	5.8%	15.636	4	0.004 ***
地域の地理や災害の歴史に対する態度	地域の災害の歴史を知ることによって、防災に関する日常の備えを見直すことができる	32.3%	19.2%	27.3%	9.539	4	0.049 **
	地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる	40.0%	22.6%	33.3%	17.685	4	0.001 ***
	災害は地域の人々の生活や産業などと深い関わりを持っている	33.2%	28.1%	31.2%	5.819	4	0.213
非常用備蓄食品に対する態度	備蓄食品は、非常時に食べる物である	37.6%	34.2%	36.3%	3.513	4	0.476
	備蓄食品は、日常食で備わっている物と違っていても仕方がない	39.7%	39.7%	39.7%	1.785	4	0.775
	非常時に備蓄食品を用いて料理はしない	13.2%	13.8%	13.4%	0.779	4	0.941
日常的な食に対する態度	いつも食事を誰かと一緒に食べたい	25.5%	16.4%	22.0%	6.165	4	0.187
	食事を作ることが好きだ	21.8%	15.2%	19.3%	4.903	4	0.297
	地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある	18.0%	10.3%	15.0%	8.794	4	0.046 **

そう思う、ややそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わないの5段階尺度のうち、「そう思う」と回答した割合(%)

(χ^2 検定)

災害ボランティアへの意向との関連

		ボランティア アをしたい (250)	ボランティア をしないと 思わない(134)	全体 (384)	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
帰宅困難者の一時滞在施設や避難所で生活する状態での知識・態度	避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる	14.0%	11.9%	13.3%	6.243	4	0.182
	健康を害さないために必要な予防行動を実践できる	7.3%	4.5%	6.3%	14.21	4	0.007 ***
	健康状態を推し量るための手段を知っている	6.4%	4.5%	5.7%	7.839	4	0.098
地域の地理や災害の歴史に対する態度	地域の災害の歴史を知ることによって、防災に関する日常の備えを見直すことができる	28.1%	26.1%	27.4%	2.802	4	0.591
	地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる	37.8%	25.4%	33.4%	8.539	4	0.074
	災害は地域の人々の生活や産業などと深い関わりを持っている	30.5%	32.8%	31.3%	1.668	4	0.797
非常用備蓄食品に対する態度	備蓄食品は、非常時に食べる物である	32.3%	43.3%	36.1%	5.478	4	0.242
	備蓄食品は、日常食べ慣れている物と違っていても仕方がない	38.2%	42.1%	39.5%	1.444	4	0.837
	非常時に備蓄食品を用いて料理はしない	12.0%	15.8%	13.4%	2.023	4	0.731
日常的な食に対する態度	いつも食事を誰かと一緒に食べたい	24.1%	18.7%	22.2%	9.315	4	0.054
	食事を作ることが好きだ	20.6%	16.4%	19.2%	14.71	4	0.005 ***
	地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある	16.5%	12.0%	15.0%	27.925	4	0.000 ***

そう思う、ややそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わないの5段階尺度のうち、「そう思う」と回答した割合(%)

(χ^2 検定)

帰宅困難者支援対策の認知との関連

		帰宅困難者支援対策 知っている (104)	知らない (280)	全体 (384)	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
帰宅困難者の一時滞在施設や避難所で生活する状態での知識・態度	避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる	18.3%	11.4%	13.3%	18.146	4	0.001 ***
	健康を害さないために必要な予防行動を実践できる	7.8%	5.8%	6.3%	10.296	4	0.036 **
	健康状態を推し量るための手段を知っている	9.6%	4.3%	5.7%	7.852	4	0.097
地域の地理や災害の歴史に対する態度	地域の災害の歴史を知ることによって、防災に関する日常の備えを見直すことができる	28.8%	26.9%	27.4%	2.122	4	0.713
	地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる	43.3%	29.7%	33.4%	11.692	4	0.020 **
	災害は地域の人々の生活や産業などと深い関わりを持っている	35.6%	29.7%	31.3%	4.705	4	0.319
非常用備蓄食品に対する態度	備蓄食品は、非常時に食べる物である	31.7%	37.8%	36.1%	3.502	4	0.478
	備蓄食品は、日常食べ慣れている物と違っていても仕方がない	42.7%	38.4%	39.5%	2.904	4	0.574
	非常時に備蓄食品を用いて料理はしない	9.6%	14.7%	13.4%	3.928	4	0.416
日常的な食に対する態度	いつも食事を誰かと一緒に食べたい	25.0%	21.1%	22.2%	1.355	4	0.852
	食事を作ることが好きだ	18.3%	19.5%	19.2%	7.866	4	0.097
	地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある	19.2%	13.4%	15.0%	9.615	4	0.047 **

そう思う、ややそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わないの5段階尺度のうち、「そう思う」と回答した割合(%)

(χ^2 検定)

9) アンケートに対する意見

次のように、本アンケート調査の結果から意見が寄せられた。調査を回答すること自体が教育の一環となったことがうかがえた。

- ◇ こうした防災に関する意識調査に回答することによって、防災について考えていく姿勢が必要であることを改めて理解することができた。
- ◇ アンケートに答えてるうちに、私の家庭は災害に対しての準備をしていないことに気づいた。非常食や飲料水など、もしもに備えないといけないと感じた。
- ◇ 一人暮らしをしていて漠然と災害に対する不安はありますが、何を最初にすればいいのかわからないので、文書などでまとめているものがあるとわかりやすくいいと思います。
- ◇ 元々静岡の真ん中辺に住んでいたのも、南海トラフや富士山噴火に備えて防災訓練がくどいくらい頻繁に行われていました。大学生になって、全員参加の避難訓練も無ければもしもの際のマニュアルも任意という有様に正直驚きました。自分の命は自分で守ることは基本ですが、かといって知らなかったで亡くなる命を少しでも減らす努力はするべきだと思っています。難しいことではありますが、そうした取り組みはどれだけやっても無駄にはならないと思うので、この際ぜひ分析に役立てていただけたらと思います
- ◇ 今後とも、意識しながら万が一に備えていこうと思う。
- ◇ 自分では災害時などに備えて準備をしているつもりだったが、通学時に被災するかもしれないと考えたことはなく、学校周辺の防災マップも確認したことがなかったので、緊急時が起こった時に慌てずに行動できるようにできるようにしなければいけないと感じました。
- ◇ 突然起きてしまう自然災害に対して、十分な備えや正しい知識を持つことは非常に大切なことだと感じます。
- ◇ 発達障害なども含めて障害がある人間向けの対応が災害時にあるのか、あるとすれば何か知りたい。
- ◇ 被災した学生たちの話を聞いてみたいです。
- ◇ 普段、災害が起こらない限りは、どうしても災害への意識は薄まってしまいがちですが、日頃からいつ来るかわからない災害について、考える事が必要であると思いました。
- ◇ 防災について少し調べてみようと思った。思ったよりも利己的な回答になって驚いている。
- ◇ 防災訓練に参加してみたいとは思いますが、部活で余裕がない事が現状です。
- ◇ 災害についてしっかり学びたいと思いました(2)。
- ◇ 災害について考えることができた(2)。
- ◇ 災害について色々考える機会になりました。ありがとうございました！

4. まとめ

本調査では、千代田区に次学する大学生の防災、および、帰宅困難者支援に対する意識の実態を把握することを試みた。

これまでの研究でも、具体的な防災行動を起こすためには、単に防災に対する知識や関心を持つだけでなく、災害に対するリスク認知を中核とした、より明確な防災意識を高める必要性が指摘されている。被害の深刻さの認知は防災行動に影響を与えることが先行研究でも報告されている^{10, 11)}。防災教育は人々の防災意識を高め、防災行動を促すことを主たる目的に掲げているが、地域の特性や問題

点、そして過去の被災経験を知ることが重要であるため¹²⁾、実際の内容は様々である。

本研究結果をみると、学生自身、通学に公共交通機関を使い、通学時間も1時間以上の学生が半数を占めることから、「被災時に、徒歩で帰宅しないと思う」と回答した学生が7割弱みられたが、「通学時に被災する可能性について考えたことがない」という回答は4割強であった。帰宅困難者支援対策については知っている学生は27.1%と少ない結果であった。また、帰宅困難者支援対策を知っている者は、知らない者に比べ、避難施設での健康管理の知識や予防行動とともに、地域の地理や歴史、そして、地域の産物や食文化などの情報を受発信していくことなどの、地域への関心や人とのつながりとの関連がみられる可能性を見いだすことができた。

清水らは、大学生の防災行動には、“大地震発生への不安・懸念”とともに、“地域および地域活動への関心”が影響を及ぼしていることを明らかにしている¹³⁾。居住地域に愛着をもたせたり、地域行事やお祭りに参加させるなど、近隣とのつきあいや地域的つながりを持たせることが、防災行動を促進させることにつながるという。元吉ら⁶⁾も、防災行動を規定する要因として“恐怖感情を刺激すること”と“地域コミュニティに対する意識を高めること”をあげる。これに加え、大学生の場合、河野ら¹⁴⁾は「多数者がどのように行動しているか」、具体的には「地震に対する備えをしている人はたくさんいる」という記述規範をもつことや、時間や面倒といったコストを削減することも防災行動を規定する要因としてあげる。

一般には、防災意識は家庭防災から地域防災への視野を広げることが想定できるが、千代田区に通う大学生にとっては地域防災、すなわち、「帰宅困難者支援」の視点が家庭防災へと関心を広げることにつながるのではないだろうか。「帰宅困難者支援」に焦点をあてた教育が、大学生の自らのいのちを守る防災行動でもあり、地域防災に目を向ける糸口となる可能性をもっていることが本調査からも明らかになっている。こうした千代田区の大学生の特性を生かした防災教育の内容を、次年度、検討していきたい。

5. 要 約

千代田区における災害対策・危機管理政策経営に資する大学版の帰宅困難者支援施設運営ゲーム等の防災教育を実施する前段階として、大学生の防災に関する意識等の実態を把握することを目的に、5大学の998名を対象にWebを用いたアンケート調査を実施し、384名から回答が得られた。その結果、以下の結果が得られた。

- 1) 自宅での災害時に飲料や食料を備蓄している者は、2/3を占めた。
- 2) 学生自身、「被災時に、徒歩で帰宅しないと思う」と回答した学生が7割弱みられたが、「通学時に被災する可能性について考えたことがない」という回答は4割強であった。帰宅困難者支援対策については知っている学生は27.1%と少なく、「健康を害さないために必要な予防行動を実践できる」「健康状態を押し量るための手段を知っている」割合もやや低かった。
- 3) 防災教育の経験のある学生は9割を占めた。その内容は、避難訓練、AED訓練、消火訓練が高率である一方、介護を必要とする人の介助体験、携帯電話を使用した情報伝達訓練、救出・救助体験、地域での話し合い、災害図上訓練(DIGなど)が10%以下にとどまった。
- 4) 災害ボランティアの経験のある者は6.3%と少数であったが、今後のボランティアの希望は65%程度に及んだ。
- 5) 防災意識は、一般的な平均値と比較すると、「被災状況に対する想像力」「災害に対する危機感」「他者指向性」「不安」、そして総合点は高い値を示したが、「災害に対する関心」が他の項目に比

べやや低い結果であった。災害に対する関心を高めることによって、防災意識のなお一層の向上が期待できる。

- 6) 帰宅困難者支援対策を知っている者は、知らない者に比べ「避難施設ならではの健康に悪影響を及ぼす可能性が高い要因を列挙できる」「健康を害さないために必要な予防行動を実践できる」、などの具体策をとることができ、「地域の地理や自然環境を知ることによって、災害が起きたときに適切な行動ができる」「地域の産物や食文化を聴いたり、調べたり、話したりすることに関心がある」などの、地域への関心、人とのつながりが大きいことが明らかになった。

謝 辞

本調査の実施にあたり、千代田区キャンパスコンソの5大学の関係者、および学生の皆さんに、調査のご協力をいただきましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

文 献

- 1) 内閣府：防災に関する世論調査（平成 29 年 11 月調査），<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-bousai/index.html>，2022 年 3 月 11 日閲覧
- 2) 全国大学生生活協同組合連合会：第 57 回学生生活実態調査の概要報告，2021
- 3) 重松幹二，向井峻大，石本哲人，亀井一郎，正本博士：福岡大学学生および教職員の防災意識調査，福岡大学工学集報，83，79-87，2009
- 4) 新井洋輔，元吉忠寛，松井豊，西道実，清水裕，竹中一平，田中優，福岡欣治，堀洋元，水田恵三：防災意識尺度作成の試み，日本社会心理学会 第 46 回大会発表論文集，702-703，2005
- 5) 内閣府：令和 3 年版防災白書—第 1 部 我が国の災害対策の取組の状況等，第 1 章 災害対策に関する施策の取組状況，附属資料 61 学習指導要領等における主な防災教育関連記述，http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/pdf/r3_all.pdf，2022 年 3 月 11 日閲覧
- 6) 元吉 忠寛，高尾 堅司，池田 三郎：家庭防災と地域防災の行動意図の規定因に関する研究，社会心理学研究 23 (3)，209-220，2008
- 7) 島崎敢・尾関美喜：防災意識尺度の作成(1)，日本心理学会第 81 回大会発表論文集，69，2017
- 8) Ozeki, M., Shimazaki, K. & Yi, T.. Exploring elements of Anti-disaster Consciousness: Based on Interviews with Anti-disaster Professionals, Journal of Disaster Research, 12(3), 631-638, 2017
- 9) 米島万有子，福田一史，中谷友樹，細井浩一：地震災害に対する学生の防災意識と行動，日本地理学会発表要旨集，100205，2015
- 10) McNeill, I. M., Dunlop, P. D., Heath, J. B., Skinner, T. C., & Morrison, D. L. : Expecting the unexpected: predicting physiological and psychological wildfire preparedness from perceived risk, responsibility, and obstacles. Risk analysis, 33 (10), 1829-1843, 2013.
- 11) Miceli, R., Sotgiu, I., & Settanni, M. : Disaster preparedness and perception of flood risk: A study in an alpine valley in Italy. Journal of environmental psychology, 28 (2), 164-173, 2008
- 12) 防災教育普及協会：地域における防災教育の実践に関する手引き，第 2 章 防災教育を実践するにあたって，16-17，2015
- 13) 清水裕：大学生の防災行動の実態と防災行動を規定する要因，東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 研究年報，5，47-57，2009
- 14) 河野萌，宮前淳子：大学生の地震防災行動の実態とその規定要因に関する研究，香川大学教育学部研究報告 第 I 部，151，35-46，2019

資料：「大学生の防災に関する意識等の実態調査」アンケート調査票

大学生の防災に関する意識等の実態調査

1. 添付の「調査に関するご説明」をお読みいただき、調査の同意についてお答えください。また、回答の途中で、同意を撤回する場合には、回答を中止し、「送信」しないでください。*

令和4年 1月 10日

皆様

令和3年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度「共同事業」
「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」
幹事大学 東京家政学院大学 酒井 治子

調査に関するご説明

本研究へのご回答にあたり、研究の目的や実施内容等をご理解していただきたく存じます。調査データは、大学生を含めた千代田区での帰宅困難者支援体制の構築に役立たせることを予定しております。

なお、調査への協力は任意であり、協力しなかったことや、途中で取りやめることで、あなたが不利益を被ることはありません。大学の授業を通して、ご依頼させていただきますが、授業の成績等に影響することは一切ありません。

この調査に関する説明の文書をお読みいただき、Google Forms の「同意します」のチェック欄に ☒ をお願いします。何卒、ご協力をお願い申し上げます。

〈研究課題〉

自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究

(1) 学生版KUG(帰宅困難者支援施設運営ゲーム)の開発

大学生の防災に関する意識等の実態調査

1. 研究の目的

近年、地震や台風等の自然災害が発生しており、首都圏においても直下型地震やゲリラ豪雨などの予測困難な大規模自然災害が発生し、対策も行われてきているところです。千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム(以下、千代田区キャンパスコンソ)の5大学・2短期大学を含む区内の大学は、千代田区と『大規模災害時における協力体制に関する基本協定』を締結しており、各大学が対応可能な範囲で「区民や一般の帰宅困難者の受け入れ」、及び「情報・食糧・飲料水などの提供」などの使命を少なからず担うことになっております。

こうした支援の実行に当たっては、教職員はもちろんのことながら、大学生自身が担うことも期待されているところです。しかし、大学における防災・減災教育は、小・中学校等に比べ、機会が少ないのが現状です。

そこで、支援のための体制づくりをめざして、現在の大学生の防災に関する意識等の実態を把握することが本調査の目的です。

2. 研究方法

東京家政学院大学人間栄養学部人間栄養学科の科目「栄養教育実習Ⅱ」、共立女子大学 文芸学部 文芸学科の科目「基礎ゼミナール_25」、「日本・東洋美術史概論 B」、科目「日本美術史各論 B」、科目「美術史演習ⅠA」、科目「日本美術史講義」、法政大学法学部科目の「スポーツ総合演習」、大妻女子大学短期大学部家政科「食生活論」、二松学舎大学 文学部 科目「表象メディア史 B」、科目「図書館情報資源特論」の受講者を対象に、Google Forms を用いて、授業時間以外に回答を依頼しております。回答頂きましたデータの解析は東京家政学院大学千代田三番町キャンパス酒井研究室及び共同研究者所属大学の研究室で行います。

3. 研究協力期間

令和4年1月10日～28日までの19日間とします。

4. 研究参加協力により生じる負担と予想されるリスク及び利益

本研究は Google Forms を用いた質問紙調査であり、参加者の負担となる行為はありません。アンケート情報が外部に流出した場合は、不利益を被る可能性があるため、これを防ぐためにプライバシーと人権の擁護には最大限の配慮をします。また、本結果を踏まえて、大学生の防災教育の内容を選定していきますので、実態に即した教育を展開したいと考えております。

5. 研究への協力と撤回について

研究の趣旨をご理解いただき、ご協力を頂きたく存じますが、協力されるかどうかはご自身で決定してください。研究への不参加、また、協力を決めてから途中で中止されても不利益を被ることはありません。データの送信後はデータの拒否をされても、データの個人特定ができないため、撤回はできません。

6. 個人情報の取り扱いについて

本研究に関するデータは、研究目的以外に用いることはなく、守秘をお約束いたします。アンケートは匿名での回答であり、個人が特定されることはありません。

7. 研究データの取り扱いについて

データは、外付け HDD に保管し、PC がインターネットに接続されていない状態で分析を行います。また、外付け HDD を鍵のかかる棚で厳重に保管し、保管義務期間が過ぎましたら破棄いたします。破棄した後は、データ開示や廃棄のご希望にはお応えできないこと、また一度、論文等にて発表されましたら、記載内容の修正はいたしかねることをご了承ください。

8. 研究成果の公表の可能性と、研究に関する情報公開の方法

この研究の成果は、学会発表や学術論文として公表を行う予定です。研究発表に関する情報をご希望の方は、下記のお問い合わせ先までご連絡ください。

9. 倫理的配慮

本研究は、東京家政学院大学倫理委員会の審査（承認番号 3倫委第42号）を受けております。

10. 研究に関する資金源および利益相反に関する事項

本研究は、令和3年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度「共同事業」の研究費により行っています。また、利益相反に関する事項はありません。

11. 研究に関するお問い合わせ先について

お問い合わせは、東京家政学院大学の酒井 (hsakai@kasei-gakuin.ac.jp) が担当します。ご連絡ください。

共同大学

下坂 智恵	大妻女子大学	短期大学部
近藤 壮	共立女子大学	文芸学部
伊藤 マモル	法政大学	法学部
堀 洋元	大妻女子大学	人間関係学部
谷島 貫太	二松学舎大学	文学部

1つだけマークしてください。

- ☐ 同意する
- ☐ 同意しない